

●第176号(二〇一五年三月)
特集 横浜が進めるオープンイノベーション対話と創造

- 1 対談・横浜から始まるオープンイノベーション 佐土原聡、小林一美
- 2 自治体がオープンイノベーションを進めるための視点
①「共創フロント」を中心とした横浜市の公民連携の取組 編集部
- 3 地域課題解決に向けた新たな取組とオープンイノベーション 山中研、河村昌美
- 4 オープンイノベーションで地域課題を解決する「ローカルグッドヨコハマ」の挑戦 吉原明香、田中省吾、山県稔生
- ①座談会「ICTプラットフォームでコミュニティ経済を創りだす」 市川博久、影山摩子弥、江森克治、藤原徹平
- ②地域課題を解決するオープンイノベーションプラットフォーム「ローカルグッドヨコハマ」―新しい公共に果たすその役割と可能性― 内田篤宏、宮島真希子
- ③クラウドファンディングにおける3つの事例を中心に 編集部
- 6 経済を革新するオープンイノベーション
①雇用を生み出し、地域経済を活性化させるオープンイノベーション 土屋朋宏、落合大輔、関口昌幸
- ②座談会「シビックテクノロジーは地域経済を活性化するか」 原亮、関治之、古川和年、宮田正秀
- ③インタビュー「大阪イノベーションハブの挑戦」 吉川正晃、長谷川孝
- ④コラム「大阪イノベーションハブの機能について」 角勝
- 7 若者の力をオープンイノベーションに活かす！中期4か年計画のデータを用いたユースハッカソンを題材に
①インタビュー「若者の人材育成とICT教育」 南場智子、長谷川孝
- ②横浜ユースを通じたオープンイノベーションの可能性 藤川遼介、松富瑞樹
- ④コラム「日本を支えていく人材の育成におけるグリー」の新たな挑戦―ものづくりを通じた社会貢献のあり方― 岸田崇志
- ⑤コラム「イノベーション・プラットフォームを支える市民によるまちづくりと若者人材育成」 横田由美子、服部京子
- ⑥コラム「なぜ、今、学生にプログラミングスキルが求められるのか？」 渡辺弘之
- 8 まとめ「オープンイノベーションに向けて」 関口昌幸、山中研、田中省吾、山県稔生
- ②政策局政策支援センターから始まるオープンイノベーション 関口昌幸

2 大学によるコミュニティデザイナー育成への挑戦

- 1 横浜でつながりを創る人々に伺う 岡崎エミ、醍醐孝典
- ①地域ケアプラザのコーディネーターとして、百年先にも続くまちのつながりを 加藤功甫、渡部清香
- ②新しいスタイルのアンテナショップ「Kinokuniya(クラカブエ)」を開設 中村郁子、野崎貴之、中盛教司
- ③学び合いのネットワークの力で子育て支援の循環を生み出す 塚原泉、松村健也、戸矢崎悦子
- ④世界で一番、地域と密着な宿を作る 山田緑、伊藤和義、高橋義成
- ⑤学校ボランティアから生まれる地域のつながり 山田緑、伊藤和義、高橋義成
- ⑥映画、音楽、読書：様々な分野からのアプローチ 沼田真一、田中昭彦、小山敬之、武田あすか
- ⑦ボランティアが支えるコミュニティカフェで元気づくり 岡本滋子、山村拓未、魚谷伸
- ⑧放課後施設を拠点に「食」を通じて地域のつながりを実現 和賀康子、廣井理絵、米満る一郎
- ⑨地域の拠点施設とのネットワークから子育て、パパの交流を生み出す 浦瀬亘、及川康志、浦山剛、北風保
- ⑩地域という「異業種集団」で鴨居の魅力をPR 狩野陽二、安養寺智、門脇賢一、北見秋満
- ⑪世代を超えた結びつき 井上晴彦、山口宣子、武智勇人、瑞智利恵
- ⑫誰もが活躍できる場づくり 清水力、山口宣子、武智勇人、瑞智利恵
- ⑬シニアパワーを引き出す地域貢献型老人クラブを栄区から！ 竹谷康生、勅使川原栄子、田中真弓
- ⑭学校や古民家から共感で広がる「見守り・見守られ」の輪 清水靖枝、藤澤智明
- 4 つながりを創る人々の養成に関連する取組
①行政からみた「協働の『地域づくり』」事業【座談会】 園城寺美紀子、中盛教司、木村文男、松岡文和、安養寺智
- ②学校・地域コーディネーターがつなぐ学校と地域 吉原明日香
- ③地域ケアプラザ 地域活動交流コーディネーターの養成について 山手英樹
- ④養成をサポートしていくために 大橋直之、前田雅美
- ⑤つながりづくりを取り組む職員 仲丸等
- ⑥保健師としての「つながりづくり」を振り返る 佐藤玲子
- ⑦住む人の思いをフルスケールの「まち」という形に変えて 新堀嘉代子、小室徹
- ⑧地域に寄り添い、本音で向き合う「地域支援」 堀田和宏、小林武、寺岡美貴
- ⑨地域に寄り添い、本音で向き合う「地域支援」 小林康夫、松岡文和、田中省吾
- 6 まとめ 編集部

はじめに

- 1 地域のまちづくり 石津啓介
- ①地域コミュニティを元気にする 名和田是彦
- ②横浜市の地域まちづくり、今後10年にむけて 卯月盛夫
- 2 地域のまちづくりで実現できたこと 石津啓介、菅井亜紀子
- ③次なる課題に挑戦 菅井亜紀子、森隆行
- ④地域まちづくり推進のあり方検討 菅井亜紀子、川原宏美
- ⑤「ヨコハマ市民まちづくり」を展望する 中里浩一郎
- ⑥「ヨコハマ市民まちづくり」の企業連携の取組 中里浩一郎
- ⑦文化政策は自治の基盤 鬼木和浩
- ⑧調査研究レポート 梶川浩
- ⑨文化政策は自治の基盤 鬼木和浩
- ⑩調査研究レポート 梶川浩
- ⑪寿地区簡易宿泊所街の高齢化と課題【第二報】 梶川浩

編集後記

「卒論」という言葉が流行語大賞にノミネートされそうな勢いである(いつまで世間で覚えているかは疑問が残るが、その時々世相を反映することも調査季報の重要な機能であろう)が、この調査季報178号が私にとつての「卒論」となるかは、この編集後記を執筆している時点で神のみぞ知ることであろう。

振り返れば、2012年4月1日に中川久美子さんと、石里徹さんと、関口さん、米満さん、林さん、石井さんたちと初めてお会いしたときに、たまたま目録の上にあった調査季報170号「特集 つながりを創る」の「ゆるやかなつながり」を中心に「を」をパラパラとめくっての感想を伝えたのが運のつきであったのかも知れないが、その後、調査季報の編集にこれほどコミットすることになるとは、正直まったく予想もしていなかった。

調査季報とは、先人の言葉を借りれば「職員主体の自由な研究発表の場」であり、「行政報告」とは異なり、正式決定されたものでもないものも、一人の研究者としての意見も、数多く含み、「市役所の職員と市民とで討議し交流しあう場」である。いわゆる普通の自治体ではおおよそ許容されない営為であり、それを可能にしているのは、横浜市が我が国最大の基礎自治体であることに起因する様々な意味での「余裕」ももちろんあるだろうが、若手を中心として、横浜市の更なる発展のために職員にも視野を向け、外部の人々と交流し、日々外部の知恵を貪欲に吸収していく職員の層の厚さ、また、それを是とし、奨励する組織風土があることも事実であろう。

オープンマインドな職員が外部に発信し、外部とオープンにつながることにより新たな価値を生み出していくための「場」として、調査季報もまた、オープンイノベーションのためのプラットフォームたるべく、変化すること、挑戦することを通じていかなければならない。私自身、これまでのオープンイノベーションな体験を通じて、変化や挑戦を恐れない姿勢こそが、このとんでもなく変化の早い時代のニーズに対応するために本質的に必要なたった一つのことである、と、やや確信めいた思いを抱いているし、その気づきの端緒となった調査季報との出会いには心底感謝している。

ありがとう調査季報！

(長谷川)

編集・発行
横浜市政策局政策課
 〒231-0017 横浜市中区港町1-1
 TEL. 045-671-4087
 FAX. 045-663-1225

2016年3月発行
 印刷/亜細亜工業写真株式会社
500円(消費税込み)